

2022.06.05

クラブ名【あおぞらクラブ】

名前【花田幸奈】

第47回全国学童保育指導員学校(西日本会場) レポート

分科会では子どもの発達について学びました。講師の先生のお話の中で印象に残るキーワードがいくつも出てきて、自身の日々の子どもたちとのかかわりを見直す機会となりました。

まず、“子どもとの距離の取り方、かかわり方”というお話は、特に私自身が高学年とかかわる際に気にかけている部分です。学年が上がるにつれて手がかからなくなっていく、また友達同士ですごく方が楽しいと感じることが増えていく高学年ですが、自分から寄ってきてくれる子もいれば、指導員側から寄っていかなければほとんど会話をしないまま1日が終わってしまう子もいます。そんな風に高学年、低学年、それぞれ学童での過ごし方、指導員へのかかわり方が違って良いのですが、時々子どもたちは「どう感じているのだろう？」と気になることがあります。私自身、子どもたちに聞くということは、勇気がいることのように感じていますが、講師の先生は、“子どもたちに聞くことが大人自身の気づきになる”ということを仰っていました。思い返してみると、これまで子どもたちの言葉で自分自身が気づかされた場面が多々ありました。

高学年と比べて、低学年の方が人数や来る頻度が多く、下校時間も早いので一緒に過ごす時間が長いということを考えると、高学年が学童ですごく時間が貴重なものであるように感じます。そんな高学年の子たちが何気なくかけてくれる言葉・思いをより大切にしていきたいとします。そして、学童では6学年の子どもたちが集団で生活をしています。“高学年に合わせる”、“低学年に合わせる”、とうことが必要な場面はもちろん出てきますが、それぞれの時期の発達を知っておくことでその都度必要な援助や手助けができるのだと改めて思いました。明日からの保育の励みになるお話をたくさん聞くことができ、とても有意義な分科会でした。